



楽壇の雄

野村光一先生の歩まれた道

第2回音楽評論家として

—2月号では先生の「修業時代のころのこと」を中心にいろいろ伺ったので、今回は音楽評論家として広く活躍されるまでをお話いただきたいのです。

よろしく願いいたします。

野村 はい、わかりました。

—先生は初めどのような所に評論をお書きになったのですか。

野村 「同人雑誌」としての月刊誌でした。

私は、大田黒元雄、堀内敬三氏などと共に「音楽と文学」という雑誌を（大田黒元雄が主幹）発行していましたから、それに書きました。

それからその頃、東京音楽学校（今の芸大）が「音楽」や、銀座の山野楽器が「月刊楽譜」などをそれぞれ月刊誌として発行していましたので、その中にもずい分書きました。

—そのような雑誌はどんな所で売られたのでしょうか。

野村 山野楽器・日本楽器などという楽器店でチョコチョコと。印刷の部数は何百冊という程度でした。

—音楽評論が新聞に載るようになったのはいつ頃でしたか。

野村 第一次大戦後です。その頃から外国の演奏家を呼べるようになったからです。

世界の一流演奏家ですから、新聞もとりあげるようになり、自然音楽評の欄を設けるようになりました。朝日新聞が初めてでした。

—先生が、初めてお書きになった音楽会のこと、御記憶ございますか。

野村 はい、大正15年です。ザレスカというロシアのピアニストの演奏会評で、四百字詰め原稿用紙一枚でした
—新聞の音楽会評を書かれたのは、やはり先生が草分けですね。

野村 はい。定期的に書くようになったのは私が最初かもしれません。それは毎日新聞でした。とにかく朝日に書いた同じ年の暮、毎日新聞社が継続して音楽会評を載

せることになり、私が毎日新聞社の学芸部へ客員として執筆するようになったのもその頃です。

それから年間書き続けました。ところが、その時分から戦争が激しくなってきたので、音楽会評どころではなくなり、自然に消滅してしまいました。

—18年間と一口に言っても非常に長い年月なのですが、その間先生お一人で書かれたのですか。

野村 いいえ、あまり長く続くので昭和15年頃から山根銀二さんと二人で書くようになりました。しかし戦争のため、18年で終わったのです。

それから戦後、私は仕事がなくなり、生活すること困難になりましたので毎日新聞社に頼んで使って貰うようになりました。

でもその時、私はもう今でいう定年の年でしたので囑託ということで事業部と学芸部の仕事をしました。

—そこで野村光一先生と毎日音楽コンクールとが結びつくわけですか。

野村 はいそうです。音楽コンクールは事業部でやっていましたから。

—ここで毎日音楽コンクールについて少しお話いただけますか。

野村 はい。一般的にみなさん「毎日音楽コンクール」と言っていますが、あれは俗称です。

本当は、ただの「音楽コンクール」なのです。

—ああ、そうですか。つい、うっかり言ってしまうがちですね。

その「音楽コンクール」も今年で41回と大変に長い歴史を持っているのですが、その流れについてお話下さい。

野村 41回も続くコンクールは世界でもないと思いますよ。確か第1回は昭和6年です。

このコンクールを発表したのは、現在のコンクール委員長である増沢健美さんです。彼が当時の「時事新報社」に声をかけたので、1回から6回までは「時事新報社」

で行なわれました。

ところが戦争が激しくなり、政府は企業統制、新聞の言論統制を行ない、弱小の新聞社を大新聞社が統合、吸収せよ、という指令を下しました。

そして、時事新報社は発刊当時から東京日々新聞と関連があったので、東京日々新聞、つまり毎日新聞に吸収されました。

その時、良いものは事業面でも続けよう、ということになって、コンクールはそのまま毎日新聞社が継承したのです。

——NHK共催という形をとるようになったのはいつ頃ですか。

野村 昭和23年です。NHKが共催になったのは、紙上面と放送面からのバックアップでコンクールは増す増す強固になるからです。

——先程、先生が、こんなに続くコンクールは他に類がないとお話下さいましたが、やはり先生方の御努力があったからこそ、続いているのだと思うのです。

そこで、どんな点が一番御苦労なさいましたか。

野村 そうですね、音楽の世界というものには、いろいろな系統があるものですから、審査員と応募者とのつながりが問題になりますね。

そこで、楽壇の有力者すべてに協力を求め、審査員の勢力・権力の平均化に大変気を使い、又苦労しました。——これからのコンクールに望まれることはございますか。

野村 はい。私はこのコンクールを通った若い優秀な人達が第一線で活躍している姿を見ると大変うれしくなりひいてはまた私自身も若返ります。

しかし、40年も続くと、コンクール自体が老朽化してくるので、そんな点を注意したいものと考えています。

又、このコンクールで優秀な成績をとった、ということで終って欲しくないのです。そのために援助の手をさしおいて、もっともっと成長してもらいたいですね。

——コンクールについてはこの位にしておきまして、先生は多くの演奏家のナマの演奏を聞いていらっしゃると思うのですが、どんな方が心に残っていらっしゃいますか。

野村 私は昔からピアノが好きでしたから、やはりピアニストに深い印象をもっています。

特に、若い時にはコルトーやラフアミノフ、バックハウスなどでした。最近ではマルタ・アルゲリッチが大変好きでした。

——日本人はよく、「音楽がない」と言われますが、いかがですか。

野村 私は日本古来の邦楽には、絶妙な音楽的センスがあると思うのです。

ただ、日本の音楽の基本的な感覚と西洋のそれとの間にずれがあるのです。ですから、早く新しい組織の上に乗って、基本的な音楽感覚に目ざめる方向に持って行くことが必要です。

日本の音楽教育もそこで問題になるのです。今の詰め込み方式から早くぬけ出て、基本的な音楽感覚に目ざめさせなくては。

——最近、小さな子供にピアノを教える先生が大変ふえているのですが、そのような先生方に何かおっしゃっていただけますか。

野村 そうですね。本物をたくさん聞くことです。絵画でもそうです。本物を見ていると本物と似せ物の区別がはっきりわかります。音楽も本物をたくさん聞くことです。

又、分析的に聞かないで、直観力で大きくまとまった聞き方をすることです。それには曲を良く覚えることも大切なことです。もちろん分析も大いに必要ですが。

——私たちは、演奏家の演奏を聞いてもなかなかそのスタイルを記憶に残す、ということが困難なのですが、先生の心の中にはテープレコーダが入っていらっしやるのですか。

野村 いいえ、(笑)

我々は、実際に演奏をいたしませんから、細かい部分部分より、その曲のアウトラインを記憶します。それには何度もくり返し聞くことです。

そして、演奏を聞くとき、そのアウトラインの上にとどのように曲想をつけるか、に注意するのです。

曲を知っているというのは大切なことです。かつて聞いた演奏家の記憶をたどることもできますし。

——私たちがやはりそうすることですか。

野村 ええ、そうです。一流の演奏を数多く聞き、判断力を養うことです。

私は永年の間に、一流の演奏家の勘所を覚えてしまいました。特にピアノに関してですが。

——きょうは、いろいろためになるお話をありがとうございました。

最後に少し横道に逸れてしまうのですが、最近の日本のマネージメントについて、どうお考えですか。

野村 日本という国は、まだまだ文化面においても歴史が浅いため、国内の音楽会にしても未発達の状態です。

ヨーロッパやアメリカでは音楽鑑賞人口が多いため、演奏会のためのビジネスが整っています。しかも対、世界的に仕事が可能です。

それから、日本のマネージメントは二重性格を持っています。1つは若い音楽家達を日本の音楽会に出演させよ、よりよい音楽家を育てる必要があります。

もう1つは、外国から優秀な音楽を招いて、国内に広める使命があります。

——大変参考になりました。

野村 今、世界の中で大きな力を持つマネージャーは、ユダヤ人が多いですよ。

又、日本の若い演奏家達がヨーロッパなどで活躍するためには、ヨーロッパやアメリカのマネージャーに必要があります。日本のマネージャーを通してという関係がまだ成り立っていないためでしょう。

——先生、きょうはお忙がしい中を本当にありがとうございました。どうぞお元気で、これからも日本の楽壇発展のために末長く御活躍下さいませよう願ひ致します